衝撃屋

ナカノ・R・シンイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
衝撃屋

【Ｎコード】
Ｎ７９３０Ｏ

【作者名】
ナカノ・Ｒ・シンイチ

【あらすじ】
世の中にはいろんなお仕事がございますが、中にはかわった仕事を生業としている方もいらっしゃいます。
この男が売り歩くもの、それは「衝撃」でございます。
つまらない、平穏無事な日常に一振りのスパイスのような衝撃を、あなたもおひとついかがでしょう。

第一話　井戸端会議の奥様

それではご想像くださいませ。
時は現代。所は日本。
都会から少し離れたとある住宅街。

うららかな小春日和の１１月の昼下がり、
灰色の鳥打帽に灰色のスーツ姿の男が歩いておりました。
男は手に黒くて薄っぺらい手さげ鞄をひとつさげ、
少し背中をまるめ、少しアゴを前に突き出し、
細い目と口角の上がった口元は、
笑っているようにも見えましたし、
見ようによっては泣いているようにも見えました。

＞ｉ１３８４２―４５３＜

たいして人通りも車通りも無い、静かな町。
それでも、所々の辻には、夕食の買出しまでの時間をもてあます主婦が何人か、
井戸端会議をしておりました。

主婦たちの会話は他愛の無いもので、
人の家の事を褒めては、自分の家の事を嘆く、
おおむね、そんな内容の会話でした。
そしてこの町の主婦たちは、
そんな井戸端会議を、何十年も繰り返していたのでございます。

さて、そこへ突然現れた先ほどの男。

新しい話題に飢えていた主婦たちは、たちまち話題にしはじめました。

「セールスマンかしら」

「泥棒ですわ。警察に通報しなきゃ」

「不審者なのは間違いないわね」

「嫌だー、娘の学校に電話しなきゃ」

「歳いくつくらいかしら？」

「若く見て三十」

「でも六十くらいにも見えるわよ」

そんな主婦たちの囁きが聞こえているのか、いないのか、
男は緩慢ながらも規則正しい足取りで主婦たちの前を通り過ぎて行きました。
それはまるで自動で動くロボットのような動きでございました。
主婦たちは噂し続けます。

「どこ行く気かしら？」

「わたしん家は通り過ぎたわね」

「あの角曲がったら三島さん家よ。
あ、曲がった」

「あらやだ、あたしちょっと見てくる」

そう言うと、慌てて家へ帰る三島さんの奥さん。
その場にいた他の主婦たちは、
好奇心で張り裂けそうな自分たちの想いを
三島さんの奥さんに託しました。

「三島さん、後で報告してねー」

「謎の男の秘密を独り占めしちゃだめよー」

「わかってるー」

そう言い残して、三島さんの奥さんは急いで男を追いかけて行きました。
角を曲がって自分の家の方を見ると、
男はやはり同じ調子で歩いていました。
男は別段、三島さんの家に寄る風には見えませんでしたが、
それでも三島さんの奥さんは男の後ろから近づいて行きました。
男が三島さんの家の前にさしかかり、そのまま通り過ぎようとした時、
三島さんの奥さんは、せき立てられる様に、
ついに男に声をかけました。

「あの、あの、わたしの家になにかご用ですか？」

その声を聞いて男の歩みは止まりました。
三島さんの奥さんは少しドキッとしましたが、
勢いにまかせて、続けて男に話しかけたのでございます。

「わたしの家に、なにかご用ですか？」
男はゆっくり三島さんの奥さんのほうに振り返りました。
男の背中は華奢で、たいして力も無さそうにみえましたが、
相手は男です。
三島さんは一人で男と対決している無謀な状況をすぐ理解し、
少し怯え、少し後悔しました。

「そ、それ以上近づかないでください警察呼びますよ。
そこはわたしの家です。
なんのご用でしょう？」

男は、かばんを地面に置いて帽子を取り、
かるく会釈をして三島さんの奥さんの問いに答えました。

「いやあ、これは奥さん
わたくしは、こちらのお宅には何も用はございません。
どうか警察へ突き出すような事はなさらないで
お見逃しくださいませ」

男の思いのほか平身低頭な様子に、
さっきまで感じていた恐怖がいっきに義憤へと変わった三島さんの
奥さん。
男を責めるように問いただし始めたのでございます。

「そうはいきませんよ。
あなたみたいな不審者は見逃せません。
この町の平和のためにも警察へ通報します」

「そんな、ご勘弁を」

「あなた、どう見たって泥棒か変質者ですよ」

「いえ、わたくしはただのセールスマンです」

「セールスマン？
押し売りじゃない」

「いえいえ、無理に売った事は一度もございません。
ご希望の方だけにお売りしております」

「何をですか？」

「衝撃です」

「はぁ？」

「わたくしは衝撃屋です」

「なにそれ？」

「はい
平穏でつまらない日常に波風をたてる屋さんでございます」

「そんなもの、誰が好き好んで欲しがるの？いらないわよ。
バッカじゃない？」

「ん～例えば奥さん、恐く無い恐怖映画観ますか？　」

「なに訳わかんない事言ってんのよ」

「急降下しない。急旋回しない。ジェットコースターに、
奥さん、乗りますか？
それじゃあまるで、子供がよろこぶ、
ゆっくり走るかわいい列車とおんなじでしょう。
貴女はもう、立派な大人なのですから、
そんな些細な刺激では満足できないのです。
大人で、現状に満足できない、
好奇心と、向上心にあふれ、
もっと自分を変えたいを思っている貴女にこそ、
むしろわたくしども衝撃屋はお役にたてると思いますよ」

「なに口車に乗せようとしてんのよ。
私は別に刺激なんて欲しくないし、
今の生活に満足してるの」

「そうですか。
それはわたくしの見立て違いでございました。
わたくしは、変質者でも泥棒でもございませんので、ご勘弁を、
それでは失礼・・・」

「ちょ、ちょっと待って」

「はい？」

「必要ないけど、
興味もないとは言ってないわ。
その衝撃っていくらよ」

「ご予算にあわせて衝撃の度合いが強くなってございます」

「そうね。
じゃあ試しに５００円でどう？
言っとくけど５００円あったら相当いいものが食べれるのよ。
その５００円に見合う衝撃を買うわ。
つまんなかったら詐欺で即警察よ覚悟しなさい」

「おありがとうございます。
５００円ですね。
それでは衝撃レベル３になりますがよろしいですか？」

「早くして、みんな向こうで待ってんだから」

「ではまいります」

「奥さん。
浪人して東京で独り暮らししてる息子さん。
借金してますよ」

「それではまた、
御用命の際はお気軽にお声かけくださいませ。
ごきげんよう、さようなら」

第一話　井戸端会議の奥様（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第二話　巡回中のおまわりさん

それではご想像くださいませ。
時は現代。所は日本。
深夜２時をまわった真夜中の、都会の外れの裏通り。
人通りも途絶え、月も出てない真っ暗で静かな夜。
みなさまご存知のあの男が歩いておりました。

灰色の鳥打帽に灰色のスーツ。
細い切れ長の目は、笑っているような、泣いているような。
その表情からは心中まったくうかがい知れないその男。
今日も今日とて何処へむかって歩いているのやら。

暗く、そして静寂が支配している街の中。どこまでも続く道端の街灯。

男は、街灯の灯りにその姿を浮かべては、闇に消え、
また次の街灯の灯りにその姿を浮かべては、また闇に消えました。

＞ｉ１３８８９―４５３＜

いくつめかの街灯の下にその姿を晒した時、
巡回をしていた警察官が男に声をかけたのでございます。

「ちょっとそこのあなた。
こんな夜中になにしてるんですか？
ちょっと君ぃ待ちなさい。

止まりなさい」

「は？わたくしのことですか？」

「そうだよ。　あなた何してるんですか？」

「道を歩いているのですが、何か？」

「こんな夜中にか？」

「夜中なのはわたくしのせいではございません。
世の中が勝手に夜中になってしまったのです」

「おかしな奴だ。　あなた職業は？」

「はぁ、こういう仕事をしております」

男は警察官に名刺をさしだしました。
名刺を受け取ると、警察官は懐中電灯でその名刺を照らし、文言を読み取りました。
すると警察官は、ますますいぶかしげに男を問いただし始めたのでございます。

「なに？・・・・・・衝撃屋？
なんだ、この物騒な屋さんは。
暴力団の一種か？
もうおまえ、タダで帰すわけにはいかんなぁ」

「お金をちょうだいできるのでしたら、
ありがたく、いただきますが」

「バカ者！金なんかやるもんか。
お前、この衝撃屋ってのは、
どんな家業なんだ」

「はい。　平穏な日常に波風をたてて、
ご予算に応じた、衝撃的な気分を味わっていただく
サービス業でございます」

「おまえは、本当にバカか？
誰が好き好んで平和な日常に波風を立てたがるものか」

「あなた様は、お見受けしたところ巡査さんのようですが、
そうでございますね。
あなたのようなご職業の方でございましたら、
さぞ毎日スリルとサスペンスに溢れたご経験をされていらっしゃる
でしょうから、
退屈などという気持ちは、　おわかりにならないでしょうなぁ。
世の中には、自分が何の為に生きているのか、
さらに、生きているのか死んでいるのかさえ実感がもてないほど、
日常に満足されてない方が、わりといらっしゃるのでございます。
そういった方々に、
生きている実感を取り戻していただくのが、
わたくしの仕事でございます」

「贅沢な悩みだ。くだらない」

「そのとおりでございます」

「で、下はいくらからなんだ？」

「はい？」

「その衝撃の値段だ。
いくらでその衝撃的な気分を味わわせてくれるんだ」

「ご希望でございますか？」

「出世の見込みのない交番勤務の巡査が、
どれだけ退屈かお前にわかるか。
道案内、酔っぱらい、道案内、酔っぱらい、道案内、酔っぱらい。
毎日、毎日、毎日、毎日、まじめに２０年。
おれはこの街の世話係か。
こんな人生にへき易してるんだ」

「下は、５０円からでございます」

「そうか。じゃあ奮発して１０００円出してやる。

百戦錬磨のおれの人生に、
せいぜい衝撃をあたえてみろ」

「そのご予算ですと、
衝撃レベル４になりますがよろしいですか？」

「おお、やってくれ」

「ではまいりますよ」

「奥さん。　万引きしてますよ」

「それではまた、

御用命の際はお気軽にお声かけくださいませ。
ごきげんよう、さようなら」

第二話　巡回中のおまわりさん（後書き）

読んでくださいましてありがとうございました＾＾

第三話　お屋敷の犬

それではご想像くださいませ。
時は現代。所は日本。

うららかな陽気の昼下がり、
郊外の高級住宅地のとあるお屋敷に、
あの男が営業にやってきました。

お屋敷の広さはおよそ１０００坪。
その白亜の豪邸は、まるでヨーロッパのお城のようです。
お屋敷には、業突く張りでケチな、お金持ちの主人と、
たくさんの召使い、そして恐ろしい番犬が住んでいたのでございます。

おや、こんな離れたところにまで、
お屋敷の主人の怒鳴り声が聞こえてまいりましたよ。

＞ｉ１３９５９―４５３＜

「なんだと、きさま！
だまって聞いてたら結局新手のセールスか！
無断でわしの屋敷に入ってきて、
わけのわからんことで金を無心しやがって。
何が衝撃屋だ。
わざわざ災難をこうむって、
金を払うバカがこの世のどこにいるんだ」

「ひいいっ、

こ、これは大変失礼いたしました」

「ほら、出ていけ、
さっさと出ていけ。
誰か、つまみ出せ」

主人がそう言うと、すぐに屈強な男が2人奥から現われました。

「乱暴はよしてくださいませ。
た、ただちに、ただちに、
退散、退散いたしますから、
ご容赦をー！」

男たちは、無言で衝撃屋を軽がると持ち上げると、
ゴミでも捨てるように、玄関先に放り出してしまいました。

ぽーーーーーーい

「うわーーーっ」

どしーーん

「あ痛たたたたた」

「ふん。腹のたつ。
わしの金を狙う奴を容赦するか。
犬をけしかけてやる。
おい、ジョンいけっ」

なんと、お屋敷の主人は衝撃屋を放り出したばかりか、
恐ろしい大きな犬まで放ちました。

「ばうわう、ばうわう」

「ひ〜〜〜。
おたすけ、おたすけ〜〜〜〜」
たったったったったったっ。

犬は1匹でしたが、とても大きくて恐ろしい犬です。
必死で逃げる衝撃屋。
追いかける犬。

「ばうわう、ばうわう」
たしっ、たしっ、たしっ、たしっ、たしっ。

「おたすけ、おたすけ〜〜〜〜」
たったったったったったっ。

お屋敷の主人は、その様子をしばらく眺めて楽しんでいました。

「はっはっはっは、愉快愉快」

そしてすぐに飽きて、家の中へ入ってしまいました。

ばたん。

するとどうしたことか、お屋敷のご主人の姿が見えなくなったとたん、
犬が急に追いかける速度を落とし始めたのでございます。

「ばうわう、ばうわう。・・・・・ば」
たしっ、たしっ、たしっ、たしっ。・・・・・た。

そして、さっきまで血相を変えて追いかけてきた犬が
衝撃屋の元へすり寄ってきたのでした。

「くう～ん。くぅ～ん
へっへっへっへ」

「？・・・・お犬さま、急におとなしくなられましたね。
もうここいらで勘弁してくださるのですね。
ありがとうございます。

じゃあ失礼いたします」

がぶっ。

「あいたっ。あんまりではございませんか。
油断させておいて後ろから噛み付くなんて。
行きます、行きます。
もう決してこちらへはまいりませんから。
それでは今度こそさようなら」

がぶっ。

「あいたっ。
なんでございますか。
わたくしになにか用があるのですか？」

「へっへっへっへ。
ばうわう、ばうわう＾＾」

「ばうわう、ばうわう。では
要領をえませんよ。
わたしにわかるようにおっしゃってください」

すると犬は地面になにか描きはじめた。

「へっへっへっへ」
描き、描き、描き、描き。

「なんですか？
〇、一、〇、一、
わかりませんねぇ」

犬は、考えこんでいる衝撃屋に解らせようと、
前足で、自分の描いた図形を必死でたたきました。

たしっ！たしっ！たしっ！たしっ！
〇、一、〇、一、〇、一、〇、一、

「マルイチ、マルイチ、
ああ、毎日、毎日、でございますか」

「ばうっ＾＾」

そして犬は突然走り出し、何処かへ行き・・・また戻ってきました。

たっ、たっ、たっ・・・・・・・・　・　・　・　・　・・・・
・・・・・たっ、たっ、たっ。
どす。

「鯛」

くわえてきたのは鯛。
そしてまた走り出して何処かへ行き・・・またまた戻ってきました。

たっ、たっ、たっ・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・たっ、たっ、たっ。
ころん。

「靴」

今度は靴を片方、持ってきたのでございました。
衝撃屋は、この犬がなにをか言わんとしているのかピンときました。

「毎日、毎日、退屈」

「ばうっ」

「しかしこんな大きなお屋敷で
何不自由無くお暮らしでいらっしゃるのでしょう。
何がご不満なのでございますか？」

その言葉を聞いて犬は、前足で鯛と靴を交互にたたいて
抗議しました。

たしっ！たしっ！たしっ！たしっ！

鯛、靴、鯛、靴、鯛、靴、鯛、靴。

「いやはや、これは、たいへん失礼いたしました。
衝撃屋のわたくしが愚問でございましたね。
お客様の心情をお察しできず、誠に申し訳ございません。
平和と安寧の日々といえば聞こえがよろしいが、
お犬さまにとっては、野生の本能を眠らせる、
睡眠薬のようなもの。
錆びた刀では、大根も切れますまい。
おいたわしや」

「ばうっ」

「それではお客様。
わたくしどものサービスをご所望ということで
よろしいのですね？」

「ばうっ」

「ご予算はいかほどに」

そう問われると、犬はまた走り出して何処かへ行き・・・・お金をくわえて戻ってきました。

たっ、たっ、たっ・・・・・・・　・　・　・　・・・・・
・・・・・たっ、たっ、たっ。
かさっ。

「１０，０００円でございますね。
それでは衝撃レベル５になりますが、
よろしいですか？」

「ばうっ」

「それではまいりますよ」

「あなた、捨てられるみたいですよ」

「それではまた、
御用命の際はお気軽にお声かけくださいませ。
ごきげんよう、さようなら」

第三話　お屋敷の犬（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

第四話　蟹漁師

それではご想像くださいませ。
時は現代。所は日本。季節は冬。

沖まで続く白い波頭。
磯の岩肌に激しくぶつかり砕け散る波。
石つぶてのような雪が横殴りに吹き付ける激しい吹雪。

鉛色の空は、ビョオビョオと悲鳴のような笛の音を奏で
鉛色の海は、地響きのような低く大きな音を立てて荒れ狂う、ここは冬の日本海。
丹後半島のとある海岸でございます。

そしてこの極寒の真冬の日本海の波打ち際を
寒さに凍えながらあの男が歩いておりました。

＞ｉ１４０２４―４５３＜

背広の襟を立て、背中をまるめ、
帽子が飛ばないように片手で押さえながら、
例の薄っぺらい鞄を大事そうに抱え、
一歩、一歩。

激しい吹雪が男の体温を容赦なく奪い、
打ち寄せる大波が男の足元をすくいます。

やがて日は沈み、辺りは暗くなってまいりましたが、
吹雪はいっこうに止みません。

むしろ酷くなってまいりました。
男は波にさらわれ、何度も海に引きずりこまれましたが、
その都度岸に這い上がり、
また歩み続けたのでございます。

さて、その海岸の外れに一軒の漁師小屋がございました。
漁師小屋とは、漁師が船や仕掛けをしまっておく小屋です。
小屋には灯りがともっており、誰か人がいるようでございます。
小屋の中には一そうの小さな、それでも小屋いっぱいの大きさの漁船があり、
その傍らで一人、一心不乱に網の手入れをしている漁師がいました。

白髪交じりの頭に伸び放題のヒゲ。
頑丈そうな体つき、浅黒い肌。
手ぬぐいを鉢巻き代わりに頭に巻き、
防寒コートを背中に羽織り、老眼鏡をかけ、
慣れた手つきで網を直しておりました。

小屋の明かりは、裸電球ひとつ。
厳しい寒さから身を守るのは、型の古い鉄の石油ストーブひとつだけでございました。

大きな風が吹くたびに小屋は揺れ、
ハメ殺しの木枠の小さな窓の隙間からは雪が入り込み、
トタン屋根やトタンの壁、船を出すための観音開きのトタンの戸はバリバリと音をたてました。

ビヨオオオオ。

ビヨオオオオ。
ドシーンドシーン。
ドシーンドシーン。
吹雪の攻撃に耐える小屋の悲鳴にまじって
誰かが戸をたたく音がしました。
ドシーンドシーン。
ドシーンドシーン。
「誰やいな、こんな晩に」

漁師は手を休め戸のかんぬきを外し少し開けてやりました。
その瞬間を待ち伏せしていた吹雪が、いっきに小屋の中へなだれ込んできました。
そしてそこに立っていたのは、憔悴しきったあの衝撃屋でございました。

「なんやあんた死にそうな顔して」
「お晩でございます。
ちょっと具合が悪いので、
どうかしばらく休ませてはいただけませんか？」
「まあ入んないな」
「ありがとうございます。

感謝感激、雨、アラレ、いや、吹雪でございます」

「あんた冗談言うとる場合かいな。ほんまに死にそうやで。
ほらストーブの近くに来な」

「ありがとうございます。
おお、暖かい。
生きながらえました」

「あんたずぶ濡れやん。
はよ脱いで、ワシのシャツとパッチでよかったら着たらええわ。
ほんでワシのこの防寒コート着とんないな、
ワシはええで」

「おお、さようでございますかご親切いたみいります。
実のところ、この寒さと空腹で半ば観念していたのですが、
こちらの灯りを見つけて藁にもすがる思いで戸をたたかせていただきました。
それではお言葉に甘えて衣服をお借りしてよろしいでしょうか？」

「ああ、すぐ着替えな。
ほんで濡れたんはどっかストーブの近くの船のへりにでも掛けときないな。
壁に干したらあかんで、すぐ凍ってしまうでな」

「ありがとうございます」

衝撃屋は勧められるままに乾いた服を借り、
暖かいストーブに手をかざしました。

「これ座わんな」

漁師はそう言うと、錆びたパイプ椅子を出して衝撃屋に勧めました。
漁師小屋は壁と屋根だけの粗末な小屋なので、
床は砂浜の砂のままでした。
砂の上に直接置かれたストーブの上には、
あちこちへこんだ使い古されたヤカンが置いてありました。
漁師は壁に掛けてある袋の中からカップラーメンを2つ取り出すと、
ヤカンの湯をそそいで、その一つを衝撃屋に分けてやりました。

「ほら、食べないな」

「えっ？いただけるのでございますか？
お金、お支払いさせていただきます。
おいくらでしょう？」

「なめとんのか。
親切でしてやっとんや、金なんかいらんわいな。
やっとアホにしたらあかんで」

「申し訳ございません。ごめんなさい。
ありがとうございます。
ありがとうございます。
謹んで、謹んで、
いただかせていただきます」

「もうええわいな、さ、一緒に食べよ」

「あのう・・・」

「なんやいな」

「お箸はございませんかねぇ」

「なに言うとんやいな。
漁師はこのままガッと流し込んで喰うんや。
常識やで」

「わ、わかりました、
では、ガッと」

「嘘や。ほれ箸」

「あ、ありがとうございます。
このほうが食べやすいですからね」

「当たり前やないか」

漁師と衝撃屋は、小屋いっぱいの船の横の窮屈な場所に
ストーブをはさんで向かい合って座り、
暖かいカップラーメンを食べました。
衝撃屋の冷えきった体は、ストーブとラーメンですっかり暖まり、
もともと顔色が悪いのでたいしてわかりませんが、
血の気の引いていた顔に赤みがさしてまいりました。

そして漁師の親切に心まで暖かくなり、ほっこりしたその時。
漁師が突然態度を変え、割り箸を衝撃屋の喉に突き立てたのでございます。
そして強い口調で衝撃屋を問いただしました。

ガターン！

「おまえ何もんや？
警察の人間か？
漁協のまわしもんか？」

「えっ？」

「おかしいやろ、こんな時分にそんな背広姿でワシんとこ訪ねてくるんわ。
ワシも命かけてるんや。
ほんまの事言わんと、殺したるど」

「え？ご、誤解でございます。
わたくしは警察の者でも、
ぎょ、漁協でございますか？
そちらの人間でもございません」

「ほんな誰や」

「衝撃屋でございます」

「衝撃屋？」

「はい」

「なんなんやそれ？」

「め、名刺がわたくしの背広の内ポケットに」

そう言われると、漁師は片手で衝撃屋の喉に割り箸を突き立てたまま、
片手で船のヘリに掛けてある衝撃屋の上着の内ポケットを探り、
名刺入れを取り出し、それを衝撃屋に渡しました。

「自分で開けてみい」

「衝撃屋は、恐る恐る名刺入れを開けて、
湿った名刺を一枚取り出し漁師に見せました」

「ほんまや」

漁師は衝撃屋の喉に突き立てた割り箸を納め、
名刺を受け取り、老眼鏡をかけてまじまじと名刺を確認し直しました。

「なんやこの仕事。
なんかを破壊する仕事か？」

「いえ、平穏無事な日常に、

ご予算に応じた衝撃をご提供して、
よりドラマチックな人生を過ごしていただくサービスです」

「なんじゃそりゃ。
平穏無事が一番やないか。
誰がそんなもんに金出すんやいな」

「ほとんどの方がそうだと思います。
なので、たいして儲かりませんねぇ」

「辞めたほうがええで、その仕事」

「はは、前向きに考えます」

「ラーメンはよ食べてしまえ。
冷めるで。
悪かったな」

「わかっていただけてよかったです。
ラーメンいただきます。美味しゅうございます」

衝撃屋と漁師はまた向かい合ってラーメンを食べ始めました。
でも、心なしか漁師はすこし沈んでいるように見えます。
先にラーメンを食べ終わったのは漁師のほうでした。
漁師は、カップラーメンの底を高々と掲げて、
最後の汁の一滴まで飲み干すと、
ポリタンクの冷たい水をラーメンのカップの中にそそぎ、一口飲んで
ぽつぽつと話し始めました。

「ワシ、密猟しとんや」
「はい？」
「もう金がぜんぜん無いんや。
家賃払えんし家追い出されて、
嫁も娘も息子も今、車ん中で生活しとる・・・」

漁師は、外の吹雪の音に耳を傾けました。

「こういう嵐の晩に船出して、
沖で蟹を獲って戻ってきて、
朝暗いうちに都会から来るトラックに売るんや」

「こんな嵐の海で漁なんてできるのでございますか？」

「この丹後半島の海の底にはな。
ものすごい上等の蟹がおるんや。
ほんで今日みたいな嵐の晩は、
海の底で蟹がさわぎはじめてな、いっぱい集まってきよんや。
そこを狙う。
まともな漁師は絶対に船出さんし、
ワシらみたいに密猟で食うとる人間は、
この機を逃したら次のチャンスはいつ来るかわからへん。
できるかやないで、
やるしかないんや」

「もう永くお続けになっていらっしゃるのですか？」

「昔は本業の漁の片手間に小遣いほしさにやっとったけど、
ワシのおった漁協が漁場を国に売ってしもてからは本業になったな。
国からはいっぱい金もろたけどな、
そんなあぶく銭すぐ無くなってしもたわいな」

「そうでございますか。
どうかこれからもご無事でお過ごしくださいませ」

「ところであんたの売りもんの、その衝撃。
なんぼほどするんや」

「はあ、５０円から販売させていただいております」

「安いな。ほんな５０円でひとつ買わせてもらおか」

「あ、いえ、助けていただいたお礼に
ここは無料でサービスさせていただきます」

「あほか。怒るで。
衝撃はあんたの売りもんなんやろ。
ほんな金とらんかい。
わしかて命かけて獲った蟹はタダで人にやったり絶対せえへんで。
それがプロや」

「わかりました。
ありがたく頂戴いたします」

「ほい。５０円」

「確かに頂戴いたしました。
それではまいりますので、お受け取りくださいませ」

「お手柔らかにたのむで」

「あなた、今夜船出したら死にます」

「は、ははっ。
ははははははっ。
はーはははははははは」

漁師は、泣きながら、大きな声で笑い続けました。

荒れ狂う日本海。
漆黒の海、漆黒の空。
銃弾のように飛び交う、冷たく痛い雪。

ビヨオオオオオ・・・
ビヨオオオオオ・・・

「ワシも漁師や、死んでも蟹つかんで浜に打ち上がったる」

第四話　蟹漁師（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございました。

第五話　公園の小学生

それではご想像くださいませ。
時は現代。所は日本。

ここは、とある住宅街の小さな公園。

良く晴れた、うららかな冬の昼下がり、
このところ寒くなってまいりましたが、
今年はまだ、この街では一度も雪は降っておりません。

灰色の鳥打帽に灰色のスーツ。
ベンチに一人腰掛けているのは、みなさんご存知のあの男。
衝撃屋でございました。

薄っぺらい鞄を隣に置いて、
コンビニの白いビニール袋から衝撃屋が取り出したのは、
湯気のたった、美味しそうな肉まんでございました。

どうやら、この公園でお昼ご飯をいただこうとしているようです。

背中にあたる日差しがポカポカと心地よく、
手の中には暖かい肉まん。
カラシをたっぷりつけて食べようとしたその瞬間。
衝撃屋に悲劇がおとずれました。

「どーーーん！」

ぼとっ

「嗚呼っ！」

衝撃屋は「どーーーん」という声と同時に、背中を強く押され
手にしていた肉まんを地面に落としてしまいました。

「やったー！落としとーる。落としとーる。
おっさーん、３秒以内やったら食べれるで」

「なんてことでしょう」

「３、２、１、ぶーーーっ
もう食べれませーん」

衝撃屋を襲ったのは２人の小学生の子供でした。
４年生くらいでしょうか。
やんちゃそうな子と気の弱そうな子が衝撃屋の前に立っていました。

＞ｉ１４１９０―４５３＜

「まだ十分食べれますよ」

衝撃屋はそう言うと地面に落ちた肉まんを拾いあげました。
そして、肉まんに付いた土をはらっていると、

やんちゃそうな子がその肉まんを、衝撃屋の手からひったくりました。

「こんなん食べれるわけないやーん」

やんちゃそうな子はそう言うと、
横取りした肉まんを放り投げました。

ポーーーーン

ボトッ。

「嗚呼っ、おやめくださいませ！」

衝撃屋は思わず叫びましたが、
小学生たちは、さっさと自分たちが投げた肉まんのところへ走っていきました。
その様子を眺めるしかない衝撃屋。
地面に落ちた肉まんを囲んで見下ろしている二人の小学生。
なにやら話しております。

「おい、タカシ踏めよ」

「無理無理、もう止めよう」

「お前、言うことときかんかったら、
明日から学校で村八やからな」
「ほんでもおじさん、かわいそうやん」
「ほんならお前、これ食え」
「なんでーさー」
「食うか、踏むかどっちか」
「なんでよー」
「3、2、1、ぶーっ！
お前、村八決定。
明日から誰もお前と口きかんし」

なにやらもめ始めた小学生たちに、そっと近づく衝撃屋。

「あのーその肉まん、そろそろ返してもらっていいですかねぇ」
「うわあっ、来んなっ、
それ以上近づいたら警察呼ぶからなー」
「おじさん、ごめんなさい」
「タカシっ、勝手に謝んなやー」

「もう勘弁してくださいませ。
さ、その肉まん返してください」

「いやや、
おっさん、不審者やろ。
白状したら返したる」

「わたくしは不審者ではございません。
ただのセールスマンです」

「なに売っとん。悪質商法ちゃうんか」

「ちがいます、ちがいます。
決して無理にお勧めしたこともございませんし、
返品やクレームもいただいたことはございません」

「ほな、何屋なん？」

「衝撃屋でございます」

「衝撃屋？なにそれ？」

「ご予算に応じた衝撃的な気分を味わっていただくサービスです」

「なにそれ？ゲーム？」

「ゲームではございません。
わたくしのお売りする衝撃は、現実でございます」

「衝撃って、殴ったりすんの？

金おくれ。俺がおっさん殴ったるし」

「いえいえ、暴力的な衝撃ではございません。
気分的な衝撃でございます。
人生に退屈なさってる方、何か刺激を求めていらっしゃる方など・・・」

「タカシ買えや」

「いやん。お金無いもん」

「なーなーおっさん、
その衝撃なんぼするん？」

「５０円からお売りしております」

「やっすー！」

「なあ、タカシ買えや！」

「いややって。お金無いもん」

「あるやろがー、晩飯の金がー。
知っとんやど、お前がいっつも帰りにコンビニとかで晩飯買うとんの」

「これはあかん。
母ちゃんのぶんも買わんとあかんもん」

「５０円だけやん。ええやん。

言うことときかんと殴っど」

そういうと、やんちゃな小学生は、
友人のタカシ君の胸ぐらをつかんで殴り始めました。

「やめて、わかった。買うから、買うから」

「最初っからそう言うたら痛い思いせんでええんや」

タカシ君はやんちゃな小学生の暴力に屈して、
お母さんから預かってた晩御飯代の中から、
５０円を衝撃屋に支払いました。

「ありがとうございます。
５０円。頂戴いたします。
領収書はどうしましょう？」

「お母さんに、こんな事にお金使ったってバレたら困るので
いらないです」

「わかりました。
それでは５０円ですので、衝撃レベル１になりますが
よろしいですか？」

「はい」

「それではまいります」

「あなた。次のサッカーの試合でレギュラーに選ばれますよ」

「えーーーーー！！！！！
ほ、本当ですかーーーーーー！！！」

「うっそー！おっさん嘘ばっかり言うなよなー。
タカシがレギュラーのわけないやん。
1点も入れたこと無いのに。
俺でも補欠なんやでぇ」

「おじさん、
ありがとうございます。
ありがとうございます。
お母さんにはよ知らせんと」

「よかったですね。
あなた、夜一人で練習していらっしゃるようですね。
監督さんがちゃんと見てたみたいですよ。
それに、あなたが活躍できないのは、
あなた自身に問題があるわけでは無いことも、
監督さんは見抜いておられるようです。
期待に応えられるように、これからもがんばってくださいね」

「ありがとう・・・がんばる・・・がんばるから」

泣き始めたタカシ君。

「アホちゃう。
こんなサッカーの事なんもしらんおっさんに嘘言われて泣いて喜ん

で。
お前がレギュラーの訳ないやん。
お前がレギュラーになるんわ、俺がプロになって１００年後や。
おっさん、子供や思て適当な事言うたらあかんで」

「ははは、サッカーについては、
確かにわたくし明るくございませんが、
お買い求めいただいた衝撃は本物でございます。
よほどの事が無い限り実行されると思いますよ」

「ちょっとタカシ金貸せや。
おっさん俺、１００円出すし、
俺にも衝撃売ってえな。
ほらタカシ、１００円貸せって。
殴んぞ」

脅かされてしぶしぶ１００円をわたすタカシ君。

「ほらおっさん。タカシの倍の１００円や。
これで俺にも衝撃売ってくれ」

「よろしいのですか？
タカシさま、あなたのお金ですよ。
よろしいのですか？」

「うん。いい。いつか返してもらうし」

「わかりました。１００円。確かに頂戴いたしました。

それではタカシさまの倍、
レベル２の衝撃でございます」

「はよして、はよ」

「まいります」

「あなた。ご両親に期待されてませんよ」

「それでは、肉まん返していただきますね」

第五話　公園の小学生（後書き）

【あとがき】

文中に「村八」という言葉が出てまいりました。
これは「村八分」のことです。
村八分とは村の中で問題のある者と付き合いを絶ち、無視することで、
十分な付き合いのうち、葬儀と火事の２つの付き合い以外を絶つことです。
現代の社会では使われない言葉ですが、
何処で覚えたのかわたくしの小学校では脅し文句に使われておりました。
学校で教える言葉ではございませんから、
何処かの大人が子供に吹き込んだのでしょう。

読んでいただきましてありがとうございました。
次回をお楽しみに＾＾

第六話　５１２ＢＢ

皆様ご想像くださいませ。

時は現代、所は日本。
うららかな日差しの午後の住宅街を、
みなさんご存じのあの男、衝撃屋が歩いておりました。

灰色のスーツに灰色の鳥打ち帽。
平べったい黒い皮の鞄を片手に下げて、
背中を丸め、あごを突き出し、
やせ細った躰。

口角の上がった薄い上唇、
分厚い下唇。
つり上がった細い切れ長の目は、
笑っているようでもあり、
泣いているようにも見えました。

＞ｉ１８８３３―４５３＜

さて、そんななんとも怪しい風体の衝撃屋。
今日はどうやらこの住宅街で
衝撃のセールスに励んでいるようでございます。

衝撃屋のセールスとは一体どんなものでしょう。
ちょっと様子をみてみましょう。

衝撃屋はいつも規則正しく歩いています。

その動きはまるで機械仕掛けのようでもあります。
あ、今、ある家の前で立ち止まりました。
ゆっくり玄関のほうへ向き直り、
躊躇することなく玄関のチャイムを押しました。

「ピンポーン」

「はい、どなたでしょうか？」

昼間の住宅ですと、こういう場合、
家にいらっしゃるのは、たいてい奥様でございます。

インターホン越しに衝撃屋が奥様と会話をはじめました。
耳を澄ましてみましょう。

「わたくし衝撃屋という者です。
決して怪しいものではございません。
唐突ではございますが、奥様は今の平穏無事な日常にご満足されてますか？
もしご不満がございましたら、あなた様にぴったりの、
とっておきの衝撃をお届けいたしますが、
ご入り用ではございませんか？」

どうやらできるだけ印象を好くしようと、
つとめて明るく口上を述べているようです。
しかし衝撃屋の思いとはうらはらに、
怪しさは増すばかりのようでございます。

最近の家のチャイムにはカメラが付いており、家人が玄関から出てくることはめったにございません。
そうでなくても、こんな怪しい人物の前に姿を表すご婦人はそういません。

「間に合ってます。お引き取りください」

やれやれ、断られてしまったようでございます。
でも衝撃屋は表情ひとつ変えません。
あきらめて次の訪問先へ向かうようです。

衝撃屋は毎日毎日、何軒も何軒も、
こんなやりとりを繰り返しているのでございます。

さて、再び何処へともなく歩きだした衝撃屋。しばらく歩くと、
平日の昼間にしては珍しく車を洗っている５０歳ほどの男性が目に入りました。
衝撃屋は次に、この男性に声をかけたのでございました。

「こんにちわ」

「ああ、こんにちわ。
どなたでしたか？」

「はじめまして、
わたくし衝撃屋という者でございます」

「衝撃屋さんですか？
初耳のお仕事ですね。
建築関係かなにかの？」

「いえ、私はセールスマンでして、
最近自分の人生が退屈だな。とお感じの方に、
ご予算に応じた衝撃をお届けして、
刺激的な気分を味わっていただくサービスをお届けしております」

「ほお、めずらしいお仕事ですね。
しかし生憎わたくしには必要ございませんな。
わたくしは、我が愛車のフェラーリと共に刺激的で充実した毎日を
送っておるのでね。
間に合っておりますよ。
ほら、ごらんなさい。この素晴らしい車を」

そう言われて衝撃屋は男が洗っている車を眺めました。
車は大きくて格好良く、真っ赤でピカピカでございました。

「この車がフェラーリというのですか。
はじめて拝見いたします。
真っ赤で格好いいものですね」

「でしょう。わかりますか。
これはフェラーリ５１２ＢＢ。
通称ベルリネッタボクサーといわれる、
名車中の名車ですよ」

「名車中の名車でございますか。
しかし残念ながらわたくしは、自動車には疎い人間でして、
このお車の良さがよくわかりません。
普通の車とどこが違うのでございますか？」

「そこらへんの車と一緒にされちゃ困りますな。
この車は５０００ｃｃ１２気筒。
最高速度３０２ｋｍの怪物ですよ。
ちょっとエンジンをかけてあげましょう。
あなたの勧める衝撃より、
よっぽど衝撃を受けますよ」

そういうと、男は運転席に座り、
慣れた操作でエンジンをかけたのでございます。

ブオオオオオン。ブオォン。
オンオンオンオンオンオン・・・。

閑静な町内に響きわたるすごい爆音。
運転席で満足げな主人と、
車の横で細い目を少し丸くする衝撃屋。

「どーですー？
しーびれるでしょー。
これが５０００ｃｃ１２気筒のぉー・・・」

「申し訳ございませーん。

よく聞き取れませーん」

「ははははは。
こんなもんじゃありませんよー。
レッドゾーンまで叩き込んだこの車のエンジン音はもはや神ですよー」

車の主人はそう叫ぶと、
フェラーリのアクセルを踏み込んで、
さらに爆音を轟かせました。

ブオオオオオオオオオオオオ、
オンオンオン、ぶおおおん、ブオオオオン

それはもう破壊的な音でございました。
近所の家の窓ガラスをガタガタ振動させ、
衝撃屋の体にも、その強烈な振動が伝わりました。
そのあまりにも強烈な音と振動で、衝撃屋は一言も話せません。
運転席の主人は高笑いをしているようです。
しているようというのは、表情だけで声は車の爆音に消されてしまっているからです。

その時、向かいの家の2階の窓が開き、中からその家の奥さんが顔を覗かせました。

「ちょっとっ！いいかげんにしてください！静かにしてください！病人がいるんですよ！」

向かいの奥さんはとても怒っていらっしゃいます。
衝撃屋は運転席の主人の耳に顔を近づけて話しかけました。

「ごしゅじーん！向かいの奥様がお怒りですよー！」

「かまうもんかー！はーはははははは」

そして次に、このフェラーリの主人の家から、
彼の奥様が慌てて飛び出してきました。
奥様は衝撃屋を押し退けて運転席の窓に顔を突っ込んで叫びました。

「あなたー！やめてください。
なんでこんな近所迷惑な事するんですか。
お願いです。
やめてください」

「うるさいなぁ」

ブオオオオオン！

主人は一際大きくアクセルをふかせると、
ようやくエンジンを切りました。

ピシャァァン！

エンジンが止まると、
向かいの家の窓が勢いよく閉まる音がしました。
その音には、いかにも怒りが込められておりました。

住宅街には再び静寂が訪れました。
しかし肩で息をしているフェラーリの奥様の心は穏やかではありませんでした。

「もう、本当にいい加減にしてください。
年甲斐もなく、こんな派手な車買って。
そんな車が持てるほど、うちに余裕があるっていうんですか！
まだ若いのにリストラされて、
退職金、全部車に使って、それどころか貯金まで使って、
子供の大学だってまだまだお金が要るのに。
その上ご近所にまで迷惑かけて、
ここ出ていかないとならなくなったら、私たち一家、どーするんですか！」

「うるさい！いちいち男のすることに女が口を出すんじゃない！
俺の退職金だ、貯金だって元は俺の給料じゃないか。
ずっと家族のために仕事一筋でやってきたんだ。
ヨボヨボになって退職金もらったって何の使い道があるってんだ。
自分の葬式代か？
まだ元気なうちに会社が辞めれて良かったんだよ。
長年の夢がこうやって叶って、
しがない中産階級のサラリーマンがフェラーリ手に入れることができたんだ。

お前だって最初は助手席に乗って喜んでたじゃないか。
それがこの頃はなんだ。
文句ばっかり言いやがって」

「なんにでも限度ってものがあるでしょう。
お向かいのおばあさんはこの車のせいで
すっかり寝込んじゃったのよ。
町内会でもうちの車の事は問題になってんの。
人の迷惑を考えなさいって言ってんのよっ！」

「うるさい！うるさい！うるさい！」

主人はすっかり取り乱してしまいました。
そしてお向かいの家に向かって叫びました。

「おい、ばあさん。
あんたもう寿命なんだ。
自分の寿命を俺の車のせいにすんな！」

「あなた！なんてこというの！」

「おまえも文句があるんなら、
子供と一緒に出て行け！
ここは俺の家だ」

「なんですって！？」

「窓も、屋根も、茶碗も、

お前らの服も、靴も、飯も、糞も、全部俺の金で買ったものだ。
自分勝手はどっちだー！
出て行け！今すぐ出て行けー！」

「ああ、そうですか。
あなたと話してると頭がどうにかなりそうですよ。
ちょうど隆志の下宿先も決まった事ですし、
隆志のとこか実家へでも行かせてもらいますよ。
何十年も家の事は、わたしに任せっきりだったあなたに、
家事の何ができるっていうの。
家にいてもずっと仏頂面で、ほんとつまんない人生だったわ。
なんでもっと早く出て行かなかったのかしら」

「負け惜しみ言いやがって。
出てけ、出てけ、出てけー！」

「はいはいはいはい」

奥様はそういうと家に戻ってゆきました。
衝撃屋は興奮して顔を赤らめた主人に声をかけました。

「よいのですか？
奥様出て行かれますよ」

「あ、これはこれは、お見苦しい所をお見せしてしまいました。
ご心配には及びません。
わたしにはこのフェラーリがあります。
この車はわたしに文句を言ったりしません。

わたしが尽くせば尽くすほど、その輝きで感謝してくれるんです。
永遠に美しいわたしの女房ですよ。
これからはこいつと二人で楽しくやっていきます」

「それは良かったですわね。
その車に下の世話もしてもらうといいですよ」

さっき家に入った奥様がもう出てまいりました。
手にはスーツケースを一つ。
でもさすがに姿は着の身着のままでございます。

「なんだ、えらく支度が早いじゃないか」

「こんな事もあろうかと、
大事な物はまとめておいたんですよ」

「ふん。計画的犯行じゃないか。
離婚したって慰謝料なんか払わんからな」

「そうはいきませんよ。
後日、弁護士を通して私の要求を伝えますのでお楽しみに。
ところで、そちらの方はどなたですの？
あなたが辞めさせられた会社の方？」

「いえ、わたくしはただの通りすがりでして、
衝撃を売り歩いております、衝撃屋です」

「衝撃？えらく物騒なものを扱っていらっしゃるのですね」
「衝撃と申しましても爆発物とかではございません。
気持ち的なものでございまして、
お暇で退屈な方に衝撃的な情報をお届けして、
ハリのある日常を取り戻していただくサービスでございます」
「ふぅーん。
でも今の顛末をごらんになったでしょう。
私どもには必要ありませんね」
「どうやらそのようで」
「出て行くんならさっさと出て行け！」
「出て行きますわよ。
衝撃屋さん。その衝撃っておいくらするの？」
「お買い求めで？」
「ええ、最後に主人にプレゼントしてあげようと思って」
「ご自分のじゃなくて、ご主人の衝撃でございますか？」
「ええ、ダメかしら？」
「はい、高度な個人情報ですので、
たとえご家族といえどもご本人のご承諾がないと・・・」
「承諾もなにも、今そこで全部聞いているじゃない。

あなたぁ、いいわよねぇ」

「俺はびた一文出さねぇぞ」

「はいはい。最後の最後までセコい男だこと。
衝撃屋さん聞いたでしょ。
私がお金を出すから買うわ。いくら？」

「はい。衝撃の軽い順に、
５０円からとなっております」

「そう。
でも、この人にはよっぽど思い知らせなきゃダメよ。
超頑固人間が改心するほどの衝撃っていくらくらいするの？」

「そうでございますね。
レベル６ですと生命の危機に相当する衝撃がございますが、
１０万円となります」

「高いわね。もっと安くなんないの？」

「レベル５ですと１万円です」

「それはどの程度の衝撃？」

「そうでございますね。
なかなか正確には申し上げにくいのですが、
命に別状はない程度の強い衝撃です。
ご参考までに、レベル５の衝撃をご経験された方の結果を申し上げますと、

失明をされたり、手足を失われたり、刑務所にお入りになった方もいらっしゃいます」

「誰がそんなものを1万円も出して買うの？」

「わたくしもそう思いますが、
時折、お求めの方はいらっしゃいますね」

「そう、でもいいわ。それにする。
はい、1万円」

奥様はそう言うと財布から1万円札を取り出し
衝撃屋にわたしました。

「確かに頂戴いたしました」

すると衝撃屋はフェラーリの横にたたずむ主人のほうへ向き直りました。

「それではご主人。奥様からのお届け物、
レベル5の衝撃でございます」

「ちょっと待ってくれ衝撃屋さん。
それ、受け取り拒否とかできんのかね」

「はい。できません」

「だったら1万円で買い戻そう。
それだったらどうだ、あんたはぼろ儲けじゃないか。
その衝撃1万円で買うから、どっかそのへんに捨ててきてくれ」

「あなた、なんて往生際が悪いの。
素直に受け取りなさいよ」

「うるさいっ！黙れ！」

「それではまいります」

「ひいっ！」

「ご主人。次その車に乗ったら事故しますよ」

うららかな日差しの午後の住宅街を、
みなさんご存じのあの男、衝撃屋が歩いておりました。

ブオオオオオン！　キキーッ！　ドーーーン！

「あなたー！あなたー！」

ピーポーピーポー、ピーポーピーポー・・・

第六話　５１２ＢＢ（後書き）

【あとがき】

わたくしの少年時代にはスーパーカーブームというのがございました。
カウンタック、フェラーリ、ポルシェ、ロータスヨーロッパ、
ミウラ、イオタ、マセラティボーラ、
格好良くて美しく、速くて力強い、見たことも無い異国の名車。
そんな手の届かないはずのスーパーカーが、
スーパーカーショーなどと銘打って、
街の空き地にある日突然やってきた事がございました。
その時の感動は今もわたくしの中に残っております。
つい最近まで乗っておりました、マツダファミリアアスティナも、
わたくしの心の目には、フェラーリデイトナに映っておりました。
今は軽自動車に乗っておりますが、
人生の目標はランボルギーニカウンタックＬＰ５００を手に入れることでございます。
ちなみに色は白。

第七話～幻想・猫の衝撃屋～（前書き）

このお話には先の東北沖地震を連想する場面が出てきます。
作品制作時には、まさかこのような未曾有の悲劇が起こることは
予想がつきませんでした。
被害にあわれた方には心よりお見舞い申し上げます。
一日も早く、安心できる生活を取り戻されることを
願ってやみません。

第七話～幻想・猫の衝撃屋～

人が猫にされてしまったのか、
猫が人になったのか、
そんな世界がございました。

＞ｉ１９１６５―４５３＜

二本足で歩き、言葉を話し、
帽子を被って、タバコをくわえた猫達。
なにもかも人間のそれとよく似ていたのですが、
どこか猫の性質も残っており、
大方の住人は好奇心こそ旺盛ですが、飽きっぽく、
ことさら仕事に関しては、たいしてまじめに働こうとはしませんでした。

日当たりのよい道端にテーブルを出してカードをしている猫。
手からカードをこぼしながら居眠りをしています。

魚屋から魚を盗んだ泥棒猫。
ちょうど巡回中の警察猫が一目散に泥棒猫を追いかけ逮捕しましたが、
泥棒猫が盗んだ魚を、つい一緒に食べてしまいお腹がいっぱい。
泥棒猫と警察猫は猫柳の木陰で、うとうと昼寝。
泥棒猫を縛りかけの紐はすっかりほどけてしまってます。

港の定期連絡船は出発したきり朝から戻らず、
郵便はまともに届いたためしがありませんでした。

ここはそんな猫の国、マーカンダミア。
王様から平民まで、みんな昼寝が大好きで無責任な
平和で怠惰な国でした。

この国に一人の元気な少年猫がいました。
彼の名はピスタチオ。
ピスタチオにはお父さんがいませんでした。
ピスタチオは、体の弱いお母さんの松と、学校へ上がりたい妹の銀
杏のために毎日奉公していました。
奉公といっても家からどうにか通えたので住みこみではありません。
家から走って、時々歩いて1時間半ほどの、
町なかにある金魚屋さんがその奉公先です。

金魚屋さんは親方ひとりでやっていました。
親方は朝4時には起きて金魚を仕入れ、
毎朝6時に行商に出かけることになっています。
ピスタチオはその行商について行き、
口上を述べたり、金魚の桶のぶらさがった天秤を担いだりするのが
仕事でした。

ピスタチオは今日も6時きっかりに親方の家にやってきました。

「親方ー、おはようございまーす」

返事がありません。
金魚の行商に行く時間なのに。
ピスタチオは親方の家に入って行き親方を探しました。

「親方ー、親方ー、どこに居なさりますー、時間ですよー」

ピスタチオは声をかけながら親方を探しました。
親方からの返事はありませんでしたが、
ピスタチオはすぐに親方を見つけました。
親方は土間の奥の座敷でスヤスヤと眠っていました。
よく見ると、仕入れの時にもってゆく手持ち鞄を枕に、
店の屋号の入った半纏を掛けふとんにして寝ています。
丸いちゃぶ台の上には日本酒の酒瓶。
そして水浸しの畳の上には、からっぽの金魚の桶が置いてありました。

どうやら呆れた事に親方は、
今朝仕入れた金魚を、ピスタチオを待っている間に、
酒の肴にして全部食べてしまったようです。

「親方ー、親方ー」

ピスタチオは親方をゆすって起こしました。

「おっ、おー、ピスタチオ、来たのか、よし出かけるか」
「親方、出かけるかじゃないですよ、売り物の金魚はどうしたんです？」
「金魚はおめぇ、ちゃんと仕入れたに決まってるじゃねえか、ほれ、あれ？」

親方はからっぽの金魚の桶を見て驚いています。

「親方。また食べちゃったのではありませんか？」
「なに言ってやがんだよ。おいらが売り物に手出すわけねーって、ごほん！」

ぽちゃん。

親方が反論しながら咳き込むと、
親方の口から金魚が一匹飛び出して桶に飛び込みました。
金魚は桶の中で元気にゆらゆらと泳いでいます。

「あれ？」

「親方、どういうことでしょう。親方の口から金魚が出てまいりましたよ。それにお酒も召していらっしゃいますね」
「いや、酒を飲んでて、ウトウトして、金魚を腹いっぱい食べる夢を見たのさ
そしたらお前が起こしてくれて、口から金魚が・・・」

「親方ーどうするんです？これじゃあ売りに行けませんよ」
「しゃーないしゃーない、今日は休み休み、お前も帰れ」

「そんなー困りますよ、こんな調子で月の半分も仕事してないじゃないですか。
僕は日当を貰わないと困るんです」
「じゃあその金魚をやる。売るなり食うなりしろ」

「そんなー、金魚一匹もらったって」
「いらねえんなら置いて帰れ、俺の昼飯だ」

「ひどいなぁ、ありがたくいただいて帰りますよー。金魚入れるのに湯呑みをひとつお借りします」
「おお、この湯呑み持ってけ、これに入れてけ」

そういうと親方は自分が酒を飲んでいた湯呑みを

ピスタチオに渡しました。

「ありがとうございます」

「その湯呑みがいけねぇんだよ、こいつがあるから酒を飲んじまうんだ。
酒を飲んじまうと金魚を食っちまうんだ。
金魚を食っちまうと商売できねぇから、また飲んじまうんだよ、その湯呑みで。
するとまた・・・とにかくその湯呑みがみんな悪いのさ」

「じゃあ、この湯呑みもいただいて帰りましょうか？」
「いや、それは返してくれ」
「はい、じゃあ明日また来ますんで」
「はいよー、お疲れー」

ピスタチオは玄関を出て帽子をとって親方に会釈をすると、
金魚の入った湯呑みを大事そうに抱えて、さっき来たばかりの家路につきました。

街の中央通りをまっすぐ南へ３０分ほど歩くと港に出ました。
ピスタチオにとってそこは毎日見慣れた風景でした。
ついさっき親方の家に行く時にも目に入った風景のはずでした。
しかし今はどうでしょう。何か変です。たくさんの猫が騒いでいます。
そしてピスタチオは自分の目を疑いました。
なんと、港の水がありません。
すっかり干上がってます。
ちょっと前まで海だった地面に、船が点々と転がっています。
港で働いていた猫たちや聞きつけた猫たちは、これ幸いと干上がっ

た海の底に降りてゆき、
逃げ遅れた魚や蟹を獲って食べていました。

その光景を見てピスタチオは、なぜかとても不安な気持ちになったので、
その仲間には入らず家に急ぐ事にしました。

港から海岸線の一本道を東へ１時間ほど行くと、
ピスタチオがお母さんと妹と住んでいる家です。

砂浜を歩き、大きな千年猫柳が生えている岬の崖の上の森を抜けると、
ピスタチオたちが住む小さな村があるのですが、
今日はその岬が、とても遠くに感じられました。
なぜなら砂浜がまるで砂漠のように広くなっていたからです。

真っ青な空。そこには雲ひとつ浮かんでいません。
そして視界の遥か彼方まで続くまっ白な砂浜。
もちろん波の音なんかしません。それどころか、夏のさなかだというのに蝉もなぜか鳴いていません。
本当にあっけらかんとした静寂の景色の中に、
ピスタチオは居ました。

ピスタチオは、いつしか足を止めて呆然と沖を眺めていました。
いつもならずっと沖に見えるアーモン島も、
今日はまるで砂漠の彼方の幻のオアシスのように見えます。

しばらく眺めていると、アーモン島のほうで何かが光りました。
ピスタチオは目を細めて凝らします。

また光りました。
その光は、砂煙を上げて、だんだん、だんだん、ピスタチオのほうへ近づいているようです。

どどどどどどどどど・・・

近づくにつれ、それは以外に猛烈な速さで近づいていることが解りました。
ピスタチオは怖くなって逃げようとしましたが、逃げる間もなく、あっという間にピスタチオのすぐ目の前まで来ました。

どばぁーーーん！

砂煙を上げて地面から出てきた光るもの。
それは貝でできたピカピカの道でした。
道はどうやら、沖のアーモン島まで続いているようです。

ピスタチオは驚きのあまり声も出ません。
ピスタチオはとっさに湯呑みの金魚をかばい、その場にしゃがみこんでいました。
それでも何が起こったのか確認しようと薄目を開けて、砂煙の向こうを見ました。
すると、熱砂の陽炎に揺らめきながら、貝の道を一人の猫がこっちへやってくるのが見えました。

灰色の帽子に灰色の鳥打帽。
薄いカバンをだらんと下げて、背中を丸め顔を前に突き出し、
細くやせ細った躰の雄猫。
細くつり上がった目とつり上がった口角は、
泣いているようにも見え、笑っているようにも見えました。

この猫はほんとうにアーモン島から歩いてきたのでしょうか？
島までは1里はあります。
いろんな疑問が浮かんでは消え、ピスタチオはすっかり混乱してしまい、
そこから一歩も動けません。
やがてピスタチオの目の前までやってきたその猫は、
しゃがみこんだピスタチオに手を差しのべ、
親しげに話しかけてきたのでした。

「やあ、ピスタチオ君、お会いできて光栄でございます」

「は、はじめまして、おじさんは誰ですか？僕を知ってるの？」
「失礼、はじめましてでしたね。わたくしは毎日あなたを見てましたもので、つい」

「見てたって？僕を？」
「そう、毎朝この海岸通りを街の方へ駆けてたでしょ。向こうから見てました」

「向こうってアーモン島から？」
「ほう、こっちから見るとそう見えますね。でも実際はもっと遠くからです」
「遠くって？」

「銀河とアンドロメダくらいでしょうか」
「そんなに離れてたら星だって点にしか見えないのに、
僕なんて見えるわけないよ。僕もう帰らなきゃ」

ピスタチオはなんだか怖くなって、

すぐこの場を離れなければと思いました。

「まあ、まあ、せっかくお会いできたのですから、もう少しお話ししましょうよ。
ピスタチオ君は毎朝なぜ走って街へ行くのですか？」

「えっ？僕、金魚の行商やってんだよ。朝早いんだ。おじさんは？」
「わたくしの仕事ですか？わたくしは衝撃屋でございます」
「衝撃屋？」

「はい。退屈な人に衝撃を売って、退屈を吹き飛ばして元気になってもらう仕事でございます」

「このマーカンダミアはいつも退屈だよ
大人はみんな昼寝してるし、まともに働いてるのは僕みたいな子供か、
僕よりちょっと上のお兄さん猫くらいだよ」

「それならどうですピスタチオ君、退屈しのぎに衝撃を一つお買い求めになりませんか？」

「そうだなー買ってもいいけど、幾らくらいするの？」
「一番お安いものは５０にゃんからとなっております」

「５０にゃんか。面白そうだし買ってみようかな」
「おありがとうございます。８８年ぶりに、はるばるマーカンダミアまで行商にやってきた甲斐がございます」

そして、ピスタチオはポケットから手持ちの全ての小銭を取り出しました。

「あれ？ごめんなさい、４０にゃんしか手持ちが無いや」
「おお、それは残念。せっかくお買い求めになる気持ちになられたのに」

「しかた無いや、また今度にするよ。
それにここんとこ親方がちっともまともに仕事してくれないから日当がもらえてないんだ。だから無駄遣いしちゃだめってことさ」

「そうかもしれませんね。ところでそのお手持ちのものは何でございますか？」
「売り物の金魚だよ」
「ちょっと見せてもらえませんか？」
「いいよ、どうぞ」

「ほー、これは珍しい」

「えっ？そう」

「いくら金魚が赤いといっても、こんなに赤い金魚は、めったにいません。
これはイトカワという星に棲んでるルビー金魚にまちがいございますまい」

「ちがうよ、これは親方がお酒を飲んだ湯呑みに入れてるから金魚が酔っぱらって赤くなったんだよ」

「いいえ、わたくしは星から星へ渡り歩く行商人ですよ。わたくしの見立てに間違いはございません。
この金魚を譲ってくれたら１００万にゃん相当の衝撃を差し上げま

すがどうでしょう」

「１００万にゃんってすごいや。どうせならお金でおくれでないかい？
お金でくれたら、病気の母さんや学校へ行きたがってる妹が喜ぶんだけど」

「残念ながらお金はたいして持っておりません。
売り物の衝撃でしかお支払いできないのです。だめでしょうか？」

「いいよ。でもその金魚。ほんとはそんな値打ちがなくっても、
おじさんが勝手に間違えたんだからね」

「おありがとうございます。それではご好意に感謝して、このマーカンダミアの全ての猫がおどろくような
とびきり上等の衝撃を差し上げます。その前に・・・」

衝撃屋猫は話を途中で止めるとピスタチオから金魚を譲り受けました。

「この金魚がイトカワのルビー金魚だと証明してみせましょう」

衝撃屋猫はそういうと湯呑みをつかんだ手を離し地面に落としてしまいました。
湯呑みは貝の道に落ちて砕け散りました。

「あっ」

ピスタチオは思わず声を出しました。
目の前の空中に湯呑みの中の水が飴のようにひとつにまとまって浮

かび、
その中で金魚が泳いでいるのです。
「ご覧なさいピスタチオ君、イトカワのルビー金魚はこうやって水の中で息をしながら星から星へ渡って行くんだよ」
その空中の水の塊は、良く晴れた夏の太陽の光線でキラキラ輝きました
そしてその中の金魚は、まさに宝石の真っ赤なルビーのようでした。
「それじゃいただきます。あーん、ぱくっ」
なんとまあ。
衝撃屋猫はピスタチオが見とれている目の前で大口をあけて、
美しいルビー金魚を水ごと食べてしまいました。
ピスタチオは、またまた呆然としました。
目をつむり、おいしそうに口をモグモグさせている衝撃屋猫。
飲み込むのを惜しみ、存分に味を堪能した後、ゴクリと飲み込みました。
「はー美味しかった。
さてそれではお約束の１００万にゃんの衝撃をピスタチオ君にさしあげます。
覚悟は宜しいですかな」
「覚悟が必要なの？」
「１００万にゃんですからね。しかもサービスして上等のをさしあげます。よろしいですかな」
「うんいいよ。これで大人が居眠りしないよう退屈が無くなれば

マーカンダミアはもっといいとこになると思うよ」

「まいります」

「西の大陸から犬の軍団が攻めてきます。マーカンダミアの猫は全滅するでしょう」

「ええっ！そんなの嘘だよ、大陸の犬は海を渡る方法を知らないんだ。マーカンダミアに来れるわけないよ」

「おっしゃるとおり。

でも目の前の海を見てごらんなさいませ。水なんて何処にもございい

ませんねぇ。
今年は８８年に一度の、丙午の銀の年。そして今日はその８月の朔の日でございます。
８８年に一度の、ものすごく潮の満ち干きが大きくなる日なのです」
「それってどういうことなの？」
「８８年に一度、犬のいる大陸とマーカンダミアとの間の海が無くなる日なのです」
「大変じゃないかー、すぐ王様の所へ行かなきゃ。衝撃屋さんも来て」
「いや、わたくしはそろそろおいとまを・・・」

ピスタチオは強引に衝撃屋猫の手を引いて、
マーカンダミアの王様のところへ走りました。
王様は丘の上の王宮の中に住んでいます。
王宮といっても門番の兵士は居眠りをし、将軍は毛づくろい、
大臣は難しい事を考えてるふりをしてやっぱり寝ていました。
なのでピスタチオと衝撃屋猫はあっさり王様の前まで辿り着けました。
ピスタチオは王様にむかって叫びました。
「王様、大変です。犬が攻めてきます」
王様はふかふかの玉座に埋もれるように座り、居眠りをしています。
「王様っ」
「うるさいっ！聞こえておる。朕は今忙しいのじゃ」
「忙しいって、居眠りしてるだけじゃないですか」

「違う！断じて違うぞ、朕は思索にふけっているのじゃ」
「そんな場合じゃないですよ王様、大陸から犬の大軍が攻めてくるんですよ」
「なにを言っておるのじゃ、犬は海を渡れん。心配無用じゃ。悪い夢を見たんなら寝直せ」
「王様、見て、ほら海が無くなっちゃったんですよ」
王宮は小高い丘の上に立っていたので見晴らしがよくなっていました。
そして、今ピスタチオ達がいる玉座の間は四方の壁が大きくガラス張りになっており、
マーカンダミアの周囲がどこまでも見渡せました。
王様は、ゆっくりと、しぶしぶ目を開けました。
そして、いつも見えてた四方の海がすっかり消えていることに気づくと
そぐにその目は大きく見開かれました。
「なんじゃー！どうしたのじゃー！う、海が消えとるではないか」
「王様、ほら西の大陸の方角。砂漠の向こうに土煙が立ってますよ。あれ、犬の軍勢じゃありませんか？」
「ほんとか？ほんとじゃ！たたたたたた、大変じゃー、犬が攻めてきたー！
将軍！将軍！しょうぐーん！すぐに戦争の準備じゃー」
王様はあわてて叫びながら部屋を飛び出してゆきました。
王宮の広い大きな玉座の間には、ピスタチオと衝撃屋猫の二人が取り残されました。

衝撃屋猫はこの場を一刻も早く立ち去りたそうです。

「それではわたくしは、このへんでおいとまを・・・」

「おじさんちょっと待ってよ、逃げないでよ、一緒に戦ってよ」

「いや、わたくしは力もございませんし、このとおり不健康ですから、なんのお役にも立てませんよ。

このままお見逃しいただけたら助かるのですが・・・」

「そんなの無責任じゃないかー、だったら金魚返して」

「いや、それはもう食べてしまいましたし・・・」

そのとき奥の扉から、ちょうどピスタチオと同じ年頃の美しい姫猫が現れました。

「騒がしいですね」

「うわぁ、ヘーゼル姫」

それはマーカンダミア王の一人娘のヘーゼル姫でした。

姫はたいへん可愛らしく、そのうえ慈悲深く、

マーカンダミアのみんなに好かれているお姫様猫でした。

「あなた方お名前は？」

「僕はピスタチオ、そしてこのおじさんは衝撃屋さん」

「はじめまして衝撃屋でございます。お目にかかれて光栄に存じます」

姫は小さく足を折って可愛らしく挨拶をすると会話を続けました。

「先程からお父様が大慌てで戦争の準備をしてますが、犬が攻めて

くるって本当ですか？」

「はい。もうすぐそばまで来ています。ほら、あの西の方角の土煙がそうです。」

「まあ、大変。それでわたしたちどうすればよいのでしょう」

「僕と衝撃屋のおじさんが戦うよ」

「ええっ！？」

初耳の自分の運命に驚く衝撃屋猫。

「僕とおじさんで。このマーカンダミアと姫を守ってみせます」

ピスタチオの勇敢な言葉。愛国心に燃える瞳。

「いや、お願いですから、わたくしは、おいとまさせてくださいませんか・・・」

逃げ腰な衝撃屋猫の思いは、
愛国心に目覚めた若者と勇敢な言葉に感動した姫には届かず
ヘーゼル姫とピスタチオは見つめあい犬の軍団との戦いを決意しました。

「ピスタチオ、この国の大人たちはすっかり怠けてしまって誰も頼りにはなりません。
わたくしも戦います。ともにこのマーカンダミアを守りましょう」

「ヘーゼル姫」

固く手を取り合う二人。気乗りしない衝撃屋猫。
その時、何十年かぶりにマーカンダミア全土に緊急事態を告げるサ

イレンが鳴り響きました。
ウ～～～ウ～ウ～ッ、ウ～～～ウ～ウ～ッ、ウ～～～ウ～ウ～ッ・・・

しかし、このサイレンが何を意味するものなのか、
マーカンダミアの猫たちは誰もわかりません。
皆、ぽかんとスピーカーの方を眺めています。

サイレンに続き、マーカンダミア王が話しかけました。

「マーカンダミアの全ての猫のみなさん、わたしはマーカンダミアの王、マーカンダミア１６世である。
原因はわかりませんが、海が突然無くなり、西の大陸から犬の大軍がこのマーカンダミアに向かっています。
このままではわたしたちは攻め滅ぼされるでしょう。
今すぐ居眠りを止めて武器をとって戦いの準備をしてください。
繰り返します。犬が攻めてきます。武器をとって戦いの準備をしてください」

この放送を聴いて、いつもぼんやりしていたマーカンダミアの猫たちはびっくりして目を丸くしました。
ある猫は逃げ場を求めて走り回り、
ある猫はその場に固まって動かなくなりました。

こんなことは初めてです。
でも確かに目の前の海は消えています。
これは本当の事なのです。
農家の猫はクワを、レストランの猫は包丁を持って、
それぞれの家に立てこもり犬の襲撃に備えました。

犬の軍団が近くまで迫っている事は、
家の中にいても、すぐにマーカンダミアの全ての猫が感じました。
犬の軍団の足音が、まるで地震のような地響きとなって聞こえてきたからです。

そしてついに戦いは始まりました。
最初に攻撃をしかけたのはマーカンダミアの猫軍でした。
西の海岸線を守っていたマーカンダミアの軍隊が、
迫って来た犬軍の第一陣に矢を射掛けたのです。

しかし、ほとんどの兵士が生まれて初めて弓矢を使った者ばかりだったので
要領がわからず全然届きません。
どうにか矢の届くところまで敵が近づいて来たと思ったら、
突然背後の森から犬の大軍に襲われました。
犬軍は、軍団をいくつかに分けて、猫軍を挟み撃ちにしたのです。

海岸線を守っていた猫軍は壊滅してしまいました。

その様子は王宮からも見えました。
見えていましたが伝令がうまく伝わらず猫軍の指揮はバラバラです。

続いて、犬軍の本隊がいよいよマーカンダミアの西海岸に上陸してきました。
先行した犬軍の幾つかの部隊は森の中などを隠れてうまく進み、
王宮からは動きがよく見えません。
街から離れたあちこちの村に火の手が上がっています。
森の中から突然襲ってくる犬の軍団に、

小さな村は、なすすべもありませんでした。

ついさっきまで王様も将軍も大臣も兵士も、みんな居眠りしていた王宮は、
いまや蜂の巣をつついたような騒ぎです。
見晴らしのよい王宮の玉座の間が猫軍の司令本部になりました。
悪化する事態を目の当たりにしながら、皆大声で軍議を凝らしています。

ある将軍が言いました。

「今朝から無風だったが昼ごろから強い東風が吹き始めた。王宮の西側のすそ野の森に火をつけて、
森ごと犬軍を焼き払いましょう」

しかしマーカンダミア王は首を縦にはふりません。
それで森の中の犬軍を焼き殺しても、国の半分が燃えてしまいます。
するとマーカンダミアの西側に住んでいる猫もみんな焼け死んでしまうからです。
そして何より西海岸に上陸した犬軍の本隊にはたいして影響が無さそうだからです。

別の将軍が言いました。

「いくら海の水が無くなっても砂漠のような砂の上では軍隊は速やかに移動できません。
犬軍の本隊が西海岸から海岸沿いの一本道を通ってマーカンダミアの街に向かって進行しています。
森の中からこの一本道をやってくる敵を攻撃して入城を食い止めましょう」

その作戦はさっそく実行されました。
王宮の猫軍本隊から出撃した一本道攻撃部隊は、
海岸の一本道が見下ろせる森の中に陣を構えました。
しかし、いつまでたっても犬軍はやってきませんでした。

これは、犬軍の罠だったのです。
猫軍がこの場所で襲ってくることは、犬軍に予想されていました。
森の中はすでに犬軍の支配下になっており、
犬軍は、一本道を通る犬軍が襲える絶好の場所を、猫軍のためにわざと空けておいたのです。
息を殺し犬軍がやってくるのを待ち伏せしている猫軍の背後の森に犬軍は火を付けました。
おりからの東風に煽られ、たちまち猫軍は森から焼け出されました。
隠れるところを失った猫軍は西からやってきた犬軍の本隊に襲われ、
これもあえなく壊滅してしまいました。

犬軍はほとんど損害を受けることなく、確実に猫の正規軍の数を削っていきました。

作戦指令本部に絶望的な空気が流れました。

ピスタチオとヘーゼル姫と衝撃屋猫は玉座の間の隅でその様子を見ていました。
ピスタチオとヘーゼル姫は、大人たちが必死に戦っているのを見て、自分たちに出来ることはじゃまにならない事くらいだと感じたからです。

衝撃屋猫がピスタチオにちょっと得意げに言いました。

「どうです、わたくしの衝撃は。もう誰も退屈してませんねぇ」
「そうだけど、これじゃああんまりだよ、ひどいよ、これおじさんのせい？それとも僕のせい？」

「とんでもございません。わたくしどものお届けする衝撃は、
高い確率で実行される事実を、お早い目にご報告申し上げたにすぎません
その情報をどのようにご活用されるのかは、お買い求めいただいたお客様しだいでございます」

その会話を聞いていたヘーゼル姫が口を挟みました。

「ちょっと待ってピスタチオ、犬軍が攻めてくるのってこの衝撃屋さんから買った情報なの？」
「そうだよ」
「おじさん、何者なの？」
「わたくしは衝撃屋でございます。いただいたお金の額に応じた衝撃的な情報をお売りするのが、わたくしの仕事」

「おじさんちょっと来て！」
「えっ？ちょっ、ちょっと、そんなに引っ張らないでー！」
「お父様ー！お父様ー！」

ヘーゼル姫は衝撃屋猫の服の袖をひっぱって、
衝撃屋猫を大臣や将軍に囲まれている父王の所へ連れて行きました。
そして、マーカンダミア王とヘーゼル姫と衝撃屋猫の３人だけがその人だかりから抜け出し
なにやら話し始めました。

やがて王様は決心したように、

しっかりした足取りで少し高くなった玉座の壇に上り、
その場にいる臣下を見下ろしました。
大臣や将軍たちも軍議を止め王様に注目しました。

騒がしかった王宮が静寂に包まれ、
かすかに聞こえてくるのは、ここからはまだ遠くで行われている戦いの音。

そしてヘーゼル姫がマイクを持って来て父王に渡しました。
マイクは国中のスピーカーに繋がっていました。
マーカンダミア王はマイクを握ると、
目の前の臣下とマーカンダミアの全ての猫にむかって演説をはじめたのです。

「マーカンダミアの全ての猫に告げる。わたしはマーカンダミア王である。
みなさんもご存知のとおり我々は今犬の攻撃を受けている。
平和と安寧の日々の中で、爪を研ぐことを怠り続けた我々は、あまりにも脆弱であると言わざるを得ない。
我々猫が思いつくいかなる戦略も、どうやら百戦錬磨の犬軍には通用しないようだ。
ここに至っては、我がマーカンダミアの猫が全滅する事は、もはや時間の問題である。
この事実は甘んじて受け入れなければならない。
しかし、全滅が運命ならば、せめて我々猫の誇りを、大陸の犬どもに見せつけてやろうではないか」

マーカンダミア中の猫が息を殺し、
この放送に耳を傾けました。

「誇り高きマーカンダミアの猫の諸君。
すぐに王宮に集まってくれ。
たとえ負けると解っていても、最後まで力を合わせて戦おう。
王宮に集まってくれ。
大人も子供も年寄りも、みんな王宮へ集まってくれ。
我々は家族だ。誰一人欠けてはならない。
マーカンダミアの国民全員王宮に集まってくれ。
ここで最後まで力を合わせて戦おう！
勇気を出せ、爪を出せ、毛を逆立てよ！
マーカンダミアの猫の誇りを犬どもの体に刻み付けてやるのだー！
王の名において命令する、すぐに王宮に集まるのだー！」

マーカンダミア王の演説は終了しました。
マーカンダミアの猫たちにはもう、
満足な軍隊も武器も作戦もありませんでした。
猫の誇りと爪だけが残された最後の武器だったのです。

臣下たちは王様の演説に拍手を送りました。
拍手をしながら死を覚悟して泣きました。

「皆の者どうじゃ、名付けて、窮鼠猫を噛む作戦じゃ。
これからが大変じゃぞ、日ごろの運動不足を呪うがいい」

「王様だって」

大臣の一人が言いました。

「そーじゃな、そーじゃ、はははははは」

「ははははは」
王宮が笑い声に包まれました。
その様子をずっとぽかんと見つめていたピスタチオのところにヘーゼル姫がニコニコして走ってきました。
「さあピスタチオ、さっきの約束を実行してね。一緒に戦いましょう」
「ああ」
「衝撃屋さん、あなたはどうなさいます？逃げますか？それとも犬に降参されます？」
「とんでもございません。こうなった以上ご一緒させてくださいませ」
「ふふ、ピスタチオ、衝撃屋さん、今からが大忙しよ」

この放送は犬軍も聴いていました。
この国の猫が一箇所に集まる事はかえって犬軍にとって好都合でした。
最新鋭の武装をした犬軍にとって猫の誇りや爪など、まったく恐れるに足らないものだったからです。
犬軍はわざと進撃の速度を緩めたり、追い立てたりしながら、猫が王宮に集まりやすくしました。
王宮に閉じ込めて降参させるもよし、
そのまま王宮ごと焼き殺してしまうもよしと考えたのです。

そして日も傾き始めた頃、
犬軍はついに王宮を取り囲みました。
犬軍の将軍が中の猫にむかって叫びました。

「降参すれば命だけは助けてやる。お前たちの王様とその家族を差し出せ」

しかし中からは何も返事がありません。
猫たちは、息を殺して犬軍が城壁を乗り越えてくるのを待ち構えているようです。
不気味な静寂があたりを支配しています。

「もう一度だけ言う、お前たちの王様と王様の家族を差し出せば、マーカンダミアの全ての猫の命は保障する。今すぐ差し出せ。さもなくば全員焼き殺す」

なんの返事もありません。
もしかしたら中で相談しているのかもしれません。
犬軍は３０分ほど返事を待ちました。

日は沈みあたりがだんだん暗くなってきました。
夜になると、夜目が利く猫のほうが戦闘は断然有利になってしまいます。
犬軍の将軍は決断をしました。

「城門を破壊しろ、全員突撃！」

「うおおおおおん、うおおおおおん」

犬の軍団が大木を抱えて王宮の城門に突撃しました。

ドシーン、ドシーン、ドカーーーン！

3回目の突撃で猫の王宮の城門は破壊され、
そこから犬の軍団が一気になだれ込んできました。
犬の軍団は庭を駆け抜け、王宮に侵入し、
階下へ、階上へ、そして中庭へ、まるで激流の川のように王宮の隅々まで入り込んでいきました。

犬の軍団の将軍も、最後に悠々と王宮の庭に入ってきました。
そして王宮を見上げました。
日が落ちて赤紫色に染まった空に、王宮の塔が静かに不気味にそびえ建っていました。
将軍は、すぐに異変に気づきました。
それと同時に王宮内部に突撃していった、あちこちの隊から伝令が来ました。

「将軍、猫がどこにもいません」
「将軍、王宮には誰もいません」
「将軍、北の塔にも誰もいません」

将軍は焦りました。
「気をつけろ、隠れているのかもしれない。地下だ、地下を探せ、慎重にな」

「将軍、地下に向かった部隊から連絡です。地下にも誰もいないそうです」

「しまった罠か！全員退却、ひとまずこの場を離れろー！」
その時、塔の上に上った犬の兵士が東の方角を指差し叫びました。
「将軍、あれを見てください！」
その声を聞いて、犬の将軍は兵士の指差す方向に目を向けました。
将軍の目に飛び込んできたのは、小高い岬に立つ一本の大木でした。
よく見るとその木の枝に、猫が鈴生りにしがみついています。
「なんだありゃあ？」
そのおかしな光景を目の当たりにして、
将軍は思わずそう言うしかありませんでした。
犬軍の副官が将軍にささやきました。
「よくわかりませんが、この国中の猫があの木に登っているようですね」
マーカンダミア中の猫が登っている木は、
マーカンダミアの東の岬に立つ、あの千年猫柳の木でした。
ピスタチオもピスタチオのお母さんも妹も、金魚屋の親方も、
王様もヘーゼル姫も、もちろん衝撃屋猫も、
みんな登っていました。
そしてその高い場所から、犬の軍団をじっと見下ろしています。
将軍はわけもわからず、馬鹿にされたようで無性に腹が立ってきました。

「全員集合、目標東の大木、猫どもが木の上に逃げた。取り囲んで燃やしてしまえー！」

将軍の号令一下、犬の軍団は千年猫柳目指して突撃を開始しました。
怒り狂った犬の大軍が森の中を突き進み、ものすごい地響きです。
しかしその時、一陣の突風が吹き、犬の軍団の地響きよりももっと大きな地響きが起こりました。
音は東の地平線の彼方から聞こえてきました。

地平線の彼方に波頭が見えます。
なんと、干上がった海が帰ってきたのです。
それはまるで津波のようでした。

「戻れー戻れー！」

犬の将軍は全軍に丘の上の王宮に戻るよう命令しました。
大急ぎで丘の上の王宮へ引き返す犬の軍団。
大波はあっという間に迫ってきました。
兵士も将軍も関係ありません。
みんな自分が助かりたくて押しのけ合いながら丘を登ってゆきます。

しかし、溢れた海の水は、犬達のいる丘の斜面を一気にかけ登ってきたかと思うと、
逃げる犬達を追い越し、次々と飲み込んでいきました。

王宮までなんとか逃げ延びた者もいましたが、
大波の勢いは想像以上で、
結局、全ての犬は王宮ごと、その大波にすっぽり飲み込まれてしまいました。

千年猫柳に登っていた猫たちはというと、
ちょうど岬が船の舳先のような役割をして波を二つに分けてくれたので、
誰一人波に飲まれる者はいませんでした。

そして島中を飲み込んだ波が引きはじめると、
家や木やいろんな物と一緒に犬の軍団も流されてきました。
助けを求めて、たくさんの犬が千年猫柳の木にしがみつきましたが、
犬の爪は木を登るようにはできていません。
一匹残らず、波と一緒に沖へ流されてしまいました。

大きな波はその後何度もマーカンダミアを襲いました。
猫たちは千年猫柳の木の上で夜空を見上げて夜を過ごしました。
今日は新月。夜空には満天の星が輝いていました。

朝になりました。
街も村も家も流されてめちゃめちゃになってしまいましたが、
そんな事はおかまいなしに、マーカンダミアの空は輝いています。

昼頃になると貝の道が消えるというので、
衝撃屋猫は帰ることになりました。
今度会えるのはまた８８年後です。

ピスタチオとヘーゼル姫と王様が衝撃屋猫を見送りに
あの、貝の道のついた海岸まで一緒にやってきました。
真っ青な空、すこし緑がかった青い海、まっ白な砂浜。
水平線の彼方に大きな白い入道雲。
貝の道はまだ、海岸の砂浜から沖のアーモン島のほうまで続いてい

ます。
衝撃屋猫は貝の道に乗り、振り返ると、
見送りに来てくれた3人に向かって誇らしげに言いました。
「どうです、わたくしのお売りする衝撃は、たいしたものでしょう
災難だって考えようによっては利用できるんです
名付けて、災い転じて福となす作戦でございましたね」
「それを考えたのは私よ」
ヘーゼル姫が笑いながら言いました。
そして王様も衝撃屋猫に言葉をかけました。
「しかし衝撃屋さん、おかげで少し目が覚めましたよ
これからは昼寝の時間を減らして、もう少しちゃんと過ごします」
「ふふふふ、王様のお爺様も、そんな事おっしゃってましたよ。
それでは、あ、そうそう、
ピスタチオ君、これはルビー金魚のお釣りです」
「お釣り？」
「ええ、実はあのルビー金魚は２００万にゃんはする代物です。
だからこれはお釣りです」
そう言うと衝撃屋猫は背広のポケットから大きなルビーをひとつ取り出して
ピスタチオに差し出しました。
「そんなの受け取れないよ。やっぱりあれは普通の金魚だよ」

「いいえピスタチオ君、この世の中に普通のものなんて何一つないんですよ、みんな特別なんです。
君が毎日がんばってたから、わたくしは君のことをずっと見てました。
王様やヘーゼル姫やマーカンダミアのみなさんががんばったから、この国は守られた。
がんばった人は、その人のおかげで幸せになった人から、特別にご褒美がもらえるのです。
わたくしは今、とても幸せな気持ちです。だから受け取ってくださいませ」

「ありがとう、とても大きなルビーだね」

そのルビーを見て、ヘーゼル姫が言いました。

「ふふ、それはマーカンダミアの姫が結婚式の時につける宝石よ」

「えっ？じゃあこのルビーはヘーゼル姫の？」

「だって、衝撃屋さんから買った、
千年猫柳以外、マーカンダミアは全て海に沈むって衝撃。けっこう高かったのよ。
王室の宝石、いっぱい持ってかれたわ。
でもいいの。
マーカンダミアを守ることができたんですもの。
宝石はまた集めればいいのよ」

「それでは皆様さようなら、そろそろお別れの時間がやってまいりました」

衝撃屋猫がお別れをいいました。

「さようなら」
「さようなら」
「さようなら」

みんなもお別れを言いました。
そして衝撃屋猫は、貝の道を沖に向かって歩いてゆきました。
来た時と同じように、背中をまるめ、ゆっくりと。
でも不思議なことに、衝撃屋猫はゆっくり歩いているのに、
みるみる遠くなってゆきました。
そして貝の道もだんだん薄くなって、やがて衝撃屋猫といっしょに
消えてなくなりました。

「さようなら衝撃屋のおじさん」

人が猫にされてしまったのか、
猫が人になったのか、
そんな世界がございました。

おしまい。（＝・ェ・＝）

第七話～幻想・猫の衝撃屋～（後書き）

今回のお話は、衝撃屋のご感想をいただきました、ごんたろうさまのリクエストで衝撃屋を猫にしてみました。
衝撃屋の世界が読んでいただいているみなさんとの間でどんどん広がってゆけば幸いです。
ちなみに今回のお話、私はものすごく気に入っております。
ごんたろうさまをはじめ、読者のみなさま、そしてこの作品との出会いに感謝です＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7930o/

衝撃屋

2011年10月6日03時29分発行